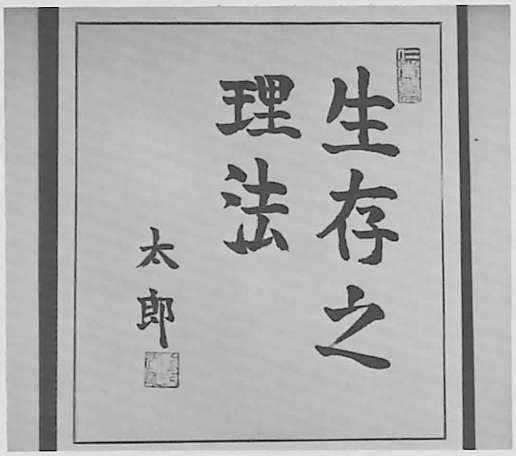
生存科学研究所 ニュース

Vol.3. No.3. 1988.5.10発行



目　次

- 巻頭言　人間医学に対する期待　藤川正信 …… 1
- 国際競争と生存科学 …… 2
  ー第2回生存科学研究会総会（第38回例会）
- 国立病院医療センター国際医療協力部の活動について …… 6
  ー第10回メディコ・エコノミックス研究委員会
- 生存科学ビュー・ポイント「地域医療」 …… 8
- エッセイズ・キュート「美的感覚三等国」 …… 8
- 維持会員だより …… 9
- ニュース・オブ・ニュース …… 11
- 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース …… 13
- ハーバード公衆衛生大学院武見講座活動報告 …… 14
- 「第39回生存科学研究会」のお知らせ …… 14
- 「第3回武見国際シンポジウム」の御案内 …… 15
- 編集後記 …… 15

発行：財団法人 生存科学研究所
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303
電 話 03-563-3518

●巻頭言

人間医学に対する期待

図書館情報大学学長・生存科学研究所評議員　藤川正信

昭和56年10月に出版された武見先生の「ベッドでつづった病人のための病人学」は、大手術を4回も受けられた後で著されたものである。敗血症、腸閉塞で死にかかった経験のある自分にとって、この先生の著書は非常に大きな意味を持つ。

先生は「人間を見る目」の重要性を説いておられるが、医療の立場からすると、医師が患者を見る目と、患者が自分を見る目の両者が含まれると思われる。しかしこの両者は医療の領域だけで育つわけではなく、日常における人間の在り様に対する注意深い観察と、そこから得たデータに基く系統的な思考内容の形成を前提とすると考えてさしつかえないであろう。

先生が「病像の多様性」と述べておられる内容は、人間という存在に認められる複雑な様相、臓器間の微妙な連合機能、心身関係に現われる部分と全体および個と全の問題にかかわるのではなかろうか。

臓器医学から人間医学への発展の道を拓くに当っては、上述の人間の本質の探究を必要とする。この際重要と思われるのは、数多くの計測・診断の機器およびそれと結びついて用いられるコンピュータから得られるデータと情報についての省察である。

データはさまざまな事象をなんらかの記号系で表現したもの、あるいは記号系に則って読みとれるもの（例：岩石、昆虫等の標本）を指す。情報は意味を生むものと解され、データから直接に意味を得ればそれが情報となるが、データの組合せや、比較照合によって情報が得られる場合もある。

意味があるかないかとか、新しい意味を見出せるか否かという判断は知識に基く。知識を情報内容が体系化されたものであると解釈すると、体系化の際に働く原理、原則あるいは視座と対象を処理する方法が問題になる。

医学の観点に立てば、解剖学や生理学から診断学などにわたる学問体系が、体系化における基盤となる。この場合には、学問内容の特殊化、細分化に沿って体系化が行なわれるのであるから、データや情報の獲得とか処理方法もそれに則ることが要求される。

一方、医療はそう簡単に割り切ることができないと思われる。医療は、個人に向うことが最終的に重要と見なされるかも知れないが、個人が位置づけられる基礎となる人間の組織とか集団とか民族とか国民を対象とする観点もきわめて重要である。そこに家族、職域、地域、国家という医療の概念の外延が形成されると共に、社会や経済に関する医学以外の学問体系の取り込みが求められる。

このように見ることが許されるとすると、医療におけるデータや情報は、狭義の医療情報にとどまれるものではなく、そのシステム化に際しては、多種大量のデータを、そこから目的や要求に従って意味を獲得しうる処理体系を確立することが要請される。

この際にきわめて重要な役割を果すのが医学・医療関係者の知識である。知識は、その生成過程においては本来個性的である。それは、広義の環境の中で育まれ、時間的変化と共に成長、発展し、知識の共有は体系化の方法によって実現する。

武見先生が健康を「動揺の中の安定」と喝破されたことは、医療、さらには「生存の理法」の研究を進めるに当たって、医学・医療関係者が知識の体系化に基づく共有と、情報の活用を図る上の大原則として理解すべきであろう。

医学・医療の専門家でない私が、生存科学研究所の活動に期待する内容は、揺れ動く多くの状況の中で、人間の生命と生存の維持・発展という大命題に対し、人間の本質の徹底した吟味と、それに基づく人間の「生き方」を提示することにある。

●第２回生存科学研究会総会　第38回例会

「国際競争と生存科学」

昭和63年４月２日(土)午後２時より、経団連会館において第２回生存科学研究会総会（昭和62年度総会）が開催された。

総会には、生存科学研究会会員のほか、生存科学研究所維持会員も参加、出席者は約60名に達した。

会議は先ず、熊谷洋生存科学研究会会長を座長とし、62年度テーマとして検討を続けてきた「国際競争と生存科学」に関する総括的講演を、このテーマの提唱者である大江精三先生から頂き、それに関する質疑、意見発表が行なわれた。次いで、63年度研究テーマに関する協議と、今回から始められることになった研究分科会の準備が行なわれた。

大江先生の講演の要旨は以下のとおり。

＊　＊　＊　＊

前年度ハイテク社会と生存科学のテーマで検討してきたが、それに国際競争の視点を加えてみようと言い出した責任もあり、今日の講演を引き受けた。それは、その前年に、米ソ両大国の先端技術に二つの悲劇があり、そのなかにあって、平和的な日本のハイテクだけが幸運に栄えていることが、世界中から目に付きすぎるような気がして気味が悪く、ここらで徹底的な自己認識をしておきたいと考えたからである。

日米の経済摩擦の蔭にも、日本のハイテクの優秀さが存在している。しかし、日本のハイテクは本当に世界をリードしているのであろうか、疑わしい気がして、それらに関する話しを研究会で伺った。さらに国際競争の観点から人類学者の意見を伺い、最後に社会経済学的見地からの話しも伺った。それにより、ハイテクの国際競争の場における日本の立場がかなり明確になり、21世紀にむかって、日本の取るべき態度がなんとなく暗示されたように思う。

日本の科学技術は、戦前は追随的第一線にあったが、現在は指導的第一線にあるといえよう。だがその本体は、未だ先端的技術の端に留まっており、本当に新しいアイデアをもった創造性には欠けているような気がする。新しい原理の学問ができるとい

この際にきわめて重要な役割を果すのが医学・医療関係者の知識である。知識は、その生成過程においては本来個性的である。それは、広義の環境の中で育まれ、時間的変化と共に成長、発展し、知識の共有は体系化の方法によって実現する。

武見先生が健康を「動揺の中の安定」と喝破されたことは、医療、さらには「生存の理法」の研究を進めるに当たって、医学・医療関係者が知識の体系化に基づく共有と、情報の活用を図る上の大原則として理解すべきであろう。

医学・医療の専門家でない私が、生存科学研究所の活動に期待する内容は、揺れ動く多くの状況の中で、人間の生命と生存の維持・発展という大命題に対し、人間の本質の徹底した吟味と、それに基づく人間の「生き方」を提示することにある。

●第２回生存科学研究会総会　第38回例会

「国際競争と生存科学」

昭和63年４月２日(土)午後２時より、経団連会館において第２回生存科学研究会総会（昭和62年度総会）が開催された。

総会には、生存科学研究会会員のほか、生存科学研究所維持会員も参加、出席者は約60名に達した。

会議は先ず、熊谷洋生存科学研究会会長を座長とし、62年度テーマとして検討を続けてきた「国際競争と生存科学」に関する総括的講演を、このテーマの提唱者である大江精三先生から頂き、それに関する質疑、意見発表が行なわれた。次いで、63年度研究テーマに関する協議と、今回から始められることになった研究分科会の準備が行なわれた。

大江先生の講演の要旨は以下のとおり。

＊　＊　＊　＊

前年度ハイテク社会と生存科学のテーマで検討してきたが、それに国際競争の視点を加えてみようと言い出した責任もあり、今日の講演を引き受けた。それは、その前年に、米ソ両大国の先端技術に二つの悲劇があり、そのなかにあって、平和的な日本のハイテクだけが幸運に栄えていることが、世界中から目に付きすぎるような気がして気味が悪く、ここらで徹底的な自己認識をしておきたいと考えたからである。

日米の経済摩擦の蔭にも、日本のハイテクの優秀さが存在している。しかし、日本のハイテクは本当に世界をリードしているのであろうか、疑わしい気がして、それらに関する話しを研究会で伺った。さらに国際競争の観点から人類学者の意見を伺い、最後に社会経済学的見地からの話しも伺った。それにより、ハイテクの国際競争の場における日本の立場がかなり明確になり、21世紀にむかって、日本の取るべき態度がなんとなく暗示されたように思う。

日本の科学技術は、戦前は追随的第一線にあったが、現在は指導的第一線にあるといえよう。だがその本体は、未だ先端的技術の端に留まっており、本当に新しいアイデアをもった創造性には欠けているような気がする。新しい原理の学問ができるとい

うような気配は少ない。バイオ・コンピュータといってもまだセンサーへの利用程度であり、現実には第5世代コンピュータのような、物理的なものの並び変えのほうができやすいのではないか。アメリカでは既に日本の先を行っているようである。

理論的には物質進化が生物進化に繋り、さらに精神社会的進化が繋っていると考えられるが、実際は、生命の誕生と精神の形成の二つの段階で大きなギャップがある。それに関わるところは皆むつかしいのは当然である。生存科学の理論で、これからの人類の生存体系、社会体系を科学的に決定することはできない。現在でも世界はそれで悩んでいるのであるから。

しかし、生存科学が背景として持っている生命進化の連続体に関して、生命の誕生と精神の形成という二つの断層が簡単には埋められないからといって、科学的に確定しないうちは何も言わない何も行なわないというようなことはできない。あやふやのままで生きていかなければならないというのが、一般的な人類の現実的問題である。

日本人もそういう特殊な文化をもって生れ、それを背負って生きている一群に過ぎない。終戦時に鈴木貫太郎大将が、日本特有の天皇制の伝統の力をうまく使って、敗戦時の一幕を上手に演じてくれなかったら、今日我々日本人の繁栄、いや生存そのものさえなかったかもしれない。絶大な占領軍の権力をもって実施された社会改革は、軍閥の解体、財閥の解体、地主制度の解体である。一般日本国民の健全な欲望がそれによって解放され、各個人の自由な勤労による幸福の追及が可能になった。こうして日本は発展してきたが、そのなかで農業は甘やかされ昔のままに残されてきた。改革に取り組んでいる農家もあるが、苦難に遇い、競争がなければ発展はない。今日の日本の繁栄は、戦争による農地解放があり、国民の活気有る自由な勤労によって幸福の追及ができるようになり、そのうえ、自由社会のなかで一番貧富の差が少ないという状況が、その根源である。この体制を崩してはいけない。

科学的に確実でないことは何も言うなでは現実への対応はできない。どこまであいまいか、どこまで確実か、そういうなかで行動することを我々は考えなければならない。現実の人間はそれぞれ皆遺伝と環境に包まれて、伝統的な習慣や宗教や社会のなかに生き死んでいく。人間が自分のものを持ちたいというのは基本的欲望である。その欲が発展には大切である。非常な不平等は改革しなければならないが、それだけでは足りない。どんなところにも生存競争はある。国際競争も文明の進歩のためには必要である。しかし、行きすぎた国際競争は人類の破滅に繋る。技術立国により裕福になった日本であるのだから、外に対してはおごらず、今や大いに国際協調に努力しなければならない。内に対しては、もう少し国民の実際生活、環境を豊かに美しくする努力をするべきである。

＊　＊　＊　＊

講演の後、下記のような話題をめぐり、熱心な討議が予定時間をオーバーして続けられた。

・現在のコンピュータは左大脳的な機能の部分だけに対応するものであり、右大脳機能的なものには踏み込んでいない。パターン認識はノイマン式の追及ではできない。大脳生理学者の取り組み方にも問題がある。今の科学は生命にも一歩も踏み込んでいない。西洋医学の進め方にも同様の問題がある。オーバーオールを見ることに目を向ける必要がある。

・脳の研究はスロウだがステデイに進んでいる。生命世界と精神世界の間の断絶はあるが、少しはそこに入っている。心の問題への接近点はニューサイエンスにあるかもしれない。心の問題は主体と客体が一緒になされなければならない。「全人格的思惟」が必要であろう。心の問題にも、物理学の場合のように、観測しようとすると観測されるものが変わってくるというような困難な問題があるのではないか。

・生命と精神の橋渡しとして、人間の成長のプロセスを追及して行くと、もう少し解るかもしれない。脳の細胞数もシナップスの数も生まれたときが一番多く、従来の考え方を変えなければいけないのかもしれない。一方、シナップスは、生理的状況でも、かなり後でも作られるともいわれる。

・蜜蜂を識別して観察していくと、個性があることが解ってきた。DNAを情報としてとらえれば心への足掛りになるかもしれない。個々の生物を丹念に観察していくと、統計的処理では見つからなかった個性が見つかってきた。個性は遺伝によるのか。環境や教育によるのではないか。

・日本の技術はアメリカに負けないくらい進んでいる。しかし、日本のは基本的技術は少なく、応用・モディフィケーションが多い。基礎が必要であり、哲学とストラテジーが必要である。しかし現実には、個々の実験を楽しんでするところが進んでおり、哲学では科学は進まない。

以上のような発言を受けて大江先生は、「人間は環境と教育の影響が非常に大きい、そこに文化の発展の可能性がある。」と追加された。

最後に板垣與一先生が「国際競争と生存科学」のまとめとして、「国際競争と国際協調とは、二つをまとめて同時に考えなければ人類の生存は成立しない。競争の力は客観的な技術や知識であり、協調は情動、心の動きである。競争の世界のなかでも協調は働かなければならないが、その結合と分離の形態が問題である。国際社会の歴史的展開のなかに、時には協調が、時には競争が強く打ち出されている。現在は、少し競争が強すぎ、その反省によって協調が強く言われすぎている。人間は知情意（論理、真理、倫理）の三位一体で行動する。それは静態的な環境と、歴史という動態的な環境との二層のなかで行動するが、競争と協調とがバランスを取った形で、より高いレベルで言えば統合された場で、意（エイトス・倫理）が働く。この倫理が統一的世界である。論理の探究をとことん進めてどこまでいけるか。情の方はまだ研究の端緒を模索している状況である。このようななかで、統合、すなわち個性の問題まで含めた総合的な認識、に迫るような方法をみつけ

ようとしているのが、我々の言う生存の理法の探究である。それが明かになって初めて生存科学の基礎が確立する。」と述べ、カント流の表現で、「協調なき競争は盲目であり、競争なき協調は空虚である。」と結ばれた。

＊　＊　＊　＊

総会議事

先ず、小平専務運営委員から、今回生存科学研究会が、公益信託武見記念生存科学研究基金の運営に移されたいきさつが説明され、それにより、生存科学研究会が、生存科学研究所と基金との機能的連結の重要な役割をもつ位置付に有ることが明確になった。また、組織の変更に伴ない代表幹事・企画委員会委員が発表された。

さらに、生存科学研究会設立の際の精神に基づいて、各種のテーマにつき手弁当で研究していく研究分科会が設置されることが発表された。(資料(1)参照)

次いで昭和63年度研究会開催予定日と会のあり方が説明された。今後、例会は年間を通しての共通テーマを巡る講演と討論、および、研究所ならびに基金の各種研究の発表との２部に分けて行なうこととなる。このあと、年間の研究テーマについて協議し「生存の質」を取り上げることに決定した。(資料(2)参照)

最後に、これから始められる研究分科会について、各分科会世話人代表から抱負を伺い、参加希望を募ったが、当日欠席のメンバーからは書類を郵送して返事を頂くことになった。

＊　＊　＊　＊

懇談会

このあと、会場を銀座の生存科学研究所に移して懇談会が開かれた。狭い会場に大勢の会員が所狭しと立って、質素な宴会ではあったが、武見先生の診療所跡での、数々の御遺品や写真のなかで、和気藹藹とした、そしてこれからの研究への熱の籠った懇談が夜遅くまで続いた。

資料(1)

生　存　科　学　研　究　会

会　長　　熊谷　洋

代表幹事　　土屋健三郎

企画委員会

委員長　土屋健三郎

委　員　梅園　忠、亀井康一郎、筑井甚吉、豊川裕之、藤川正信

生存科学研究会分科会名（仮題）

〈取纒めの世話人代表〉

1）武見文献による生存の理法研究会
〈藤川正信〉

2）生命倫理の理念と科学的接近
〈永瀬正己〉

3）福祉概念の確認と実践的方法研究会
〈豊川裕之〉

4）健康投資と地域医療の展開研究会
〈梅園　忠〉

5）メディコ・エコノミックス研究会
〈江見康一〉
6）医薬品問題研究会
〈藤野志朗〉
7）武見医政の理論と実証研究会
〈山口正民〉
8）健康の最小単位としての家庭
〈小林　登〉

資料(2)　生存科学研究会年間計画

昭和63年度　年間テーマ「生存の質」
年間スケジュール

5月21日　(1)　生存科学研究会年間テーマによる講演(1)
(2)　兵庫県生存科学研究組織の設立に関する調査研究報告

7月16日　(1)　生存科学研究会年間テーマによる講演(2)
(2)　地域医療のあり方研究分科会　研究報告

9月17日　(1)　生存科学研究会年間テーマによる講演(3)
(2)　武見フェロー研究報告

11月19日　(1)　生存科学研究会年間テーマによる講演(4)
(2)　「科学と人間」の会議総括報告

1月21日　生存科学研究分科会の研究中間報告

3月18日　第3回生存科学研究会総会
(1)　総会特別講演会（例えばレオンチェフ教授による）
(2)　次年度研究スケジュール協議（研究分科会を含む）

生存科学研究会新会員（順不同・敬称略）

安達幹郎　本田　裕　小林　登
矢島　正　角田昭治　長畑正道
上原鳴夫　竹内禮二

●第10回メディコ・エコノミックス研究委員会

国立病院医療センター国際医療協力部の活動について

第10回メディコ・エコノミックス研究委員会は、2月20日(土)午後2時から研究所会議室において行なわれた。今回は、国立病院医療センター国際医療協力部部長我妻堯委員から、国際医療協力部の活動を中心に、医療国際協力について講演頂き、それに関連して討議が行なわれた。

講演では、先ず、国立病院医療センター国際医療協力部発足の経緯が述べられ、ついで、過去1年間の国際医療協力部の活動が報告され、最後に、望ましい国際保健医療協力と現在の問題点について意見が述べられた。

その要旨は以下の通りである。

＊　＊　＊　＊

国立病院医療センター国際医療協力部の発足は、昭和52年8月の福田首相ASEAN諸国歴訪の際の、医療・文化・教育面の国際協力重視の方針にそって始められた構想による。昭和54年4月には国際医療協力センター準備室が国立病院課に置かれ、同年開始されたカンボジア難民医療援助には、3年間に全国の国立病院から計470名が派遣された。55年9月、国立医療センターに

国際医療協力センターを設置することが決定され、60年5月には WHO国際保健医療協力センターに指定された。こうして、61年1月に設置された国際医療協力施設検討会の議を経て、61年10月に国際医療協力部が発足した。

発足以来1年間の活動としては、

I. JICA関係として、

(1) 無償資金供与（基本設計調査）

ボリビア：医療機材

パプア・ニューギニア：医療機材

フィリピン：総合病院外来病棟建設、熱帯医学研究所拡張

象牙海岸：医療機材

インド：医療機材、主としてC/T

バングラデッシュ：医療機材C/T

パプア・ニューギニア：病院建設

(2) 技術協力プロジェクト

ボリビア：日本病院総合技術援助

ビルマ：教育病院

バングラデッシュ：リユーマチ熱予防治療

ネパール：結核対策

(3) 感染症調査団：アフリカ、中国、南太平洋

(4) 人口家族計画：国内委員会参加

エジプト、トルコのプロファイ調査

(5) JMTDR （災害時対外派遣組織）

：バングラデッシュ、エチオピア派遣

(6) 研修生受け入れ：中国、その他

(7) その他：中国、チリ専門家派遣

II. WHO関係

(1) セミナー、ワークショップ協力

技術移転に関するセミナー

AIDS、ATL、HB肝炎に関する総合対策会議

(2) 研修生の受入（主として短期）

ペルー、中国、スリランカ、マカオ等

(3) ジュネーブ本部HRP委員会

III. その他

日本政府主催感染症研究コース

NGO関係会議出席

これらの経験から、望ましい国際保健医療協力と現在の問題点を列挙すると、

1. 途上国国民の健康維持・医療向上に適切な援助計画の立案が必要

そこには、我が国の要請主義の限界、要請内容の検討と選択法（外務省との関係）、計画立案への参加の必要（外務省やJICAとの関係）、予算の有効適切な配分と消化等の問題がある。

2. 適切な専門家の派遣が必要

そこには、人材確保の困難性、国立施設の定員増加、必要な専門分野の確認、帰国後の身分保障、医学教育の改革等の問題がある。

3. 研修指導体制の確立

研修指導者の定員確保、研修施設の拡充整備、医師免許の問題等がある。

4. 協同研究の推進

研究指導者の定員確保、研究施設の拡充整備、研究終了免状の交付等の問題がある。

5. 関係各省庁間の密接な連絡

外務省、厚生省国際課・病院課、JICA無償資金協力部・医療協力部・研修事業部・青年海外協力隊・JMTDR等の間の情報交流が欠ける。国際医療協力部には情報が入りやすい。

現在年間の技術協力は40億円にもなって

いるが、国民に知られ無さすぎる。無駄がないようにしなければならない。

＊　＊　＊　＊

討議では、まず国際技術協力に対する評価の必要が強調され、現在評価体制や評価の基準が不十分であることが指摘された。このことは経済協力についても同様である。また、要請主義だけに問題があるとは限らず、提供国側の計画によるときにも問題があることが指摘された。最後に、国際医療協力部ではなく、国際医療協力センターとして機能の拡充を図る必要が参加委員から強調された。

●生存科学ビュー・ポイント

地　域　医　療

中山内科医院院長・生存科学研究所常務理事　中山昌作

日本医師会長としての武見先生の実践活動を振り返ってみると、「地域医療の実現」の一語に集約できるように思われる。医師会長就任当時の武見先生の講演などを読み返してみると、地域医療という言葉こそ見られないが、生命の尊厳、健康の価値観、パーソナリティの尊重、健康の地域特性、環境、生態学、住民の連帯感、健康教育、プロフェッションの社会活動等々、地域医療の構成に必要な概念が、既に至る所に発見できる。武見先生の言われる地域医療は、医療の原点への復帰であると同時に、健やかな人類の生存へ向けての医療の発展的改革でもある。それは、環境のなかで社会という集団を形成して生存する人間達が、その環境のなかで自分達の社会と健康を守るために科学的手法を用いて行なう社会的活動であると要約することができよう。

先生が医師会長在任中の最晩年の講演「医療制度更新の起点としての医師会病院」には、「地域医療の概念」と小見出しまで付けてこれに触れておられる。すなわち医学が科学であるためには、物理学が実験物理と理論物理があって成り立つように、医学にもアドミニストレーティブ・メディシンが必要であるが、人間の社会を考えるときに、バイオロジーの概念無しに単なる物理学理論で律することには問題がある。この考え方から、地域社会と個人を同時に把握するというエコロジーの概念を導入して「地域医療」に到達した、と述べられている。

武見先生が地域医療を言い出されてから既に4半世紀。今や日本中何処へいっても地域医療という言葉が聞かれる。しかし、そこで言われる地域医療が、はたして武見先生が言われたような深い意味を持っているのかどうか。

●エッセイズ・キュート

美的感覚三等国

ロンドンやパリの街角にたつと、「ヨーロッパの街は、どうしてこうもきれいなの

だろう」と感ずる。23年前、初めてヨーロッパを訪れたときも、そう感じた。その後、訪れる度に同じ思いをする。

「理由は簡単ですよ。電柱と広告です」。イギリスに長く住んでいる友人の見方だ。確かに、ロンドンやパリでは、電線が地下に埋設されている。地震の多い日本で、電線を地下に入れることは難しいのかもしれないが電線が東京の美観を壊していることは事実だ。

友人の話によると、ヨーロッパでは、殆どの都市が、広告は美観を壊すという理由で厳しく規制している。例えば、看板をビルの上に掲げるようなことは普通は認めない。また、広告の色についても、周囲の建物との調和を乱さないよう制限している。フランクフルトやコペンハーゲンなどでは、街の一角に円形の広告塔をたてて、そこにだけビラを張るよう規制している。

都市だけではない。今回、訪れた西ドイツ・ルール地方の家電機器工場では、周囲の田園風景を損なわないよう細心の注意が払われていた。例えば、工場名を示すような大きな看板は何処にも出ていなかった。正面玄関の内側には、工場名が比較的大きめに表示してあったが、それは白地の上に白の文字を立体的に浮きだたせただけだ。

「日本は、美的感覚では三等国ですね」同行者の一人がつぶやいた。「それにしても、日本の都市計画関係者は、何をしていたのか、といいたくなりますね」。

ここまで、日本の企業に期待するのは難しいだろう。しかし、東京の都心から、広告を一掃するくらいは出来そうだ。

＊　＊　＊

マンチェスターで会ったあるイギリス人のエンジニアは、「最近、東京を訪問したばかりだが、東京もきれいだ」と言った。しかしよくきいてみると、それは皇居付近のことだけを指して言っている。

確かに丸の内周辺は、ヨーロッパの都市なみにきれいだ。だが、そこにも、ある有力信託銀行の看板が、でかでかと出ている。おそらく、この信託銀行の社長さんは、ヨーロッパに行ったことがないのだろう。(O)

維持会員だより

武見先生と東洋医学

我が国で最初の本格的な東洋医学の研究機関である北里研究所附属東洋医学総合研究所は昭和47年６月に創立された。しかし、この機関の設立の推進者が故武見太郎先生であられたことはあまり知られていない。先生が東洋医学の研究所を設立する構想を持たれたのは昭和43年頃と聞いている。そして、政界、財界、学界に及ぼす先生の強い影響力によって、多くの人々の御協力をいただくことができて実現に至ったと聞いている。その過程では、先生を中心とした世話人会のような組織が設けられ、幾多の曲折を経ながら、先生と特に関係の深い北里研究所のブランチとして設置されることが決定し、47年６月の創立に至ったものである。先年物故した私の父敬節も何回となく武見先生のお招きを受け、御相談にあず

かり、そして先生の御推挽で初代の所長に就任するに至ったと聞き及んでいる。

父から個人的に聞いた話では、父は市井の一開業医であり、このような大任は医学界一般に影響力のある大家こそふさわしいと申しあげて、所長就任を固辞したとの事である。しかし、武見先生の「東洋医学は永年東洋医学で苦労してきた君がやらなければだめだ」とのお言葉で、遂に就任を承諾するに至ったとのことであった。

昭和49年に、私は『東洋医学をさぐる』という編著を日本評論社から出版したが、その折にぶしつけにも武見先生に手紙を書いて、御執筆をお願いしたことがあった。すると、葉書に御自筆の御返事をいただき、「書きましょう」とのことである。「漢方医学雑感」と題するこの文章の中には幾つかの重要な指摘がなされている。まず、漢方医学の重要性を武見先生に教えられたのは、先生の患者であられた幸田露伴であったということである。小林勇の『蝸牛庵訪問記』には次のように書かれている。「去年の春も先生（露伴）は余り工合がよくなかった。四月になってから、武見太郎氏に診てもらうことになった。武見氏は私の肝臓ジストマをなおした医者で、その名前は先生にもよく知れていた。先生が次第に弱るのを心配して（昭和16年）四月二十日の日に、岩波茂雄と私がすすめて、蝸牛庵で武見氏に診てもらったのである……」。それ以後、昭和22年７月30日に露伴の臨終の脉をとられるまで、武見先生は露伴の最も信頼を寄せた主持医であり、その間に御二人の間でさまざまな会話が交されたことと思われる。武見先生によると、「露伴先生は、人間が生命を続けている限り、自身の体内で自己を守るあらゆる複雑な操作が行われているという前提のもとに、それが病人にどのようにあらわれるかということを考え、そして漢方医学は直観の医学として発展してきたことを話して下さった」という。

北里の東医研はその後順調に発展して現在に至った。私は49年に非常勤として入所し、51年に常勤となり、61年以降所長を勤めている。初代所長であった父が55年10月に急逝した時に、すぐかけつけてくださり、葬儀の折には友人代表として心暖まる弔辞をいただいた武見先生もお亡くなりになられてしまった。先生とは何回となく個人的にお話をうかがう機会に恵まれ、その一つ一つが貴重な、そして心暖まる思い出として残されている。その一つであるが、ある雨の日のこと、研究所の自室に居た私に受付から電話がかかってきた。「武見様が御面会です」とのこと。びっくりして玄関に行くと、傘を持った先生が立っておられた。「先生、御用でしたらお電話をくださったら参上しましたのに……」と言うと、「そうはいかんよ。君にちょっと頼みたいことがあって来たんだ。人に物を頼むのに来てもらうわけにはいかん」とのことである。そして、ある薬剤について調べてくれるようにとのことでサンプルを置いていかれた。「それじゃ頼むよ」と言われて、雨の中に出て行かれた先生の後姿を私は忘れることはできない。

(㈳北里研附属東洋医学総合研究所所長　大塚恭男)

＊　＊　＊　＊

〈生存科学研究会分科会へのお誘い〉

本ニュースの「生存科学研究会」報告の

文中にもご紹介しましたように、今回生存科学研究会に分科会を設け、多くの会員の方々に御参加頂きいろいろなテーマで自主的な研究を始めました。維持会員の方も研究会会員となれば参加することができます。

維持会員の方が研究会会員になるには、研究会会員2名の推薦を添えてお申し込みいただき、研究会の承認を得ればなることができます。研究会例会ならびに研究分科会へ参加ご希望の方は、研究所事務局までお申し出ください。

なお、**法人維持会員**の場合は、法人代表者またはその代理者（複数可）を個人維持会員と同様に研究会会員の資格保有者とみなしますので、上記の手続きでお申し込みください。

新規維持会員、寄付者の紹介

（昭和63年2月1日～昭和63年3月31日）

個人会員

角田昭治　㈱文献新社代表取締役

本田　裕　㈱文献新社開発部長

法人会員

大塚製薬㈱

寄付

個人

高田　勗	20,000円

法人

㈳生命保険協会	5,000,000円
㈱北海道拓殖銀行	405,000円
㈱安川電機製作所	330,000円
㈱東海銀行	795,000円
神田通信工業㈱	90,000円
沖電気工業㈱	300,000円
東洋通信機㈱	78,000円
㈱ダイヘン	80,000円

ニュース・オブ・ニュース

研究所日報

3月4日　第6回総務委員会

3月17日　「第3回武見国際シンポジウム」第2回実行委員会

3月18日　第3回理事会・評議員会合同会議

3月31日　第17回地域医療のあり方研究分科会

4月2日　第2回生存科学研究会総会（第38回例会）

4月13日　「科学と人間」の会議

＊　＊　＊　＊

第2回広報委員会

2月18日午後3時から、研究所会議室において第3回広報委員会が開催された。

研究所の今年度活動報告、財団の財政状況、それと関連する維持会員獲得状況の説明のあと、研究所ニュースの編集および研究所にかかわる広報活動全般に関して協議が行なわれた。ニュースについては、過日行ったアンケート調査の結果を検討し、印刷の活字体を明朝体に改めることになった。アンケートで頂いた御意見については、なるべくその御要望に答える方向で編集することにするが、紙面を大幅に増やすことは現段階ではできないので、現状のなかで改善するように努める。

＊　＊　＊　＊

昭和63年度事業計画・予算案成立

生存科学研究会　財団と基金を結ぶ機能的要として位置付け

昭和63年3月18日(金)午後2時から、研究所会議室において、財団法人生存科学研究所第3回理事会・評議員会・公益信託武見記念生存科学研究基金第10回運営委員会合同会議が開催され、同会議において、昭和63年度事業計画ならびに予算案が協議され承認された。この議題は、3月4日に行なわれた第6回総務委員会において事前に協議・準備されている。

今回は、生存科学の研究を遂行するうえで財団と基金が一体となって機能しているという認識の下に、上記のような合同会議という形で行なわれた。今回の事業計画の大きな特長は、生存科学研究会を、財団と基金の両者の研究の発表の共通の場、相互の情報の交換の場であるとし、両者を結ぶ要としての位置付けを明確にしたこと。また、従来財団で行なってきた同会の運営を基金に任せ、財団は自主研究を従来以上に強化できるようにしたということである。自主研究としては、これまでの「科学と人間」の会議の延長線上で「生存の理法に関する基本哲理」の研究、その社会的展開のための「医療の投入産出理論による研究」と「医療システム」の研究を設ける。

協同研究としては従来別立てとしていた「ハーバード大学武見プログラム」を主体として、より安定的、合理的な形での協同研究の継続が見込まれている。具体的には、財団の基本財産を一応目標最低線の10億円まで確保しうる見込みがつき、同プログラムへの継続的送金が明確にできることとなったためである。今年度は予定通り日本において第3回武見シンポジウムが開催され、第2回医薬品ワークショップも企画されている。

当期収入予算は、基本財産収入3,000万円、基本財産運用収入4,600万円、寄付金収入は継続寄付金収入の1,800万円を含め合計12,200万円。前期繰り越しを含む収入合計は17,900万円。それに対し、予算支出の部は、管理費として、会議費、製本、広報費等を含め1,400万円、人件費2,300万円、事務所費 700万円で合計4,400 万円、一般事業費6,800万円(内ハーバードとの協同研究に5,800万円)で、当期支出合計は15,100万円、次期繰り越し収支差額は2,800万円である。

このほか、顧問に岩佐凱実氏、小西新兵衛氏が新任され、評議員の交代で太田幹二氏が就任され、新たに田村貞雄氏、中山昌作氏が常務理事に任命された。

＊　＊　＊　＊

第17回地域医療のあり方研究分科会

3月31日に行なわれた研究分科会においては、研究会報告書の作成のため各自が分担した原稿を持ちより検討を行なった。この結果、報告書は、本年7月に行なわれる生存科学研究会へ報告することが出来るよう、それまでにまとめることとし、原稿の完成に向け作業を継続している。

＊　＊　＊　＊

㈶生存科学研究所では、以前から「シンボル・マーク」を設定しては、との声があります。皆様のアイデアをお寄せ下さい。(連絡先：03—563—5195　財団事務局)

公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

基金日報

3月18日　第10回運営委員会

4月21日　第3回武見記念論文・文集編集委員会

4月28日　第1回基金企画委員会

＊　＊　＊　＊

第10回公益信託武見記念生存科学研究基金運営委員会

第10回運営委員会は、3月18日(金)生存科学研究所理事会・評議員会と合同で行なわれた。

今回は、役員・顧問の任期満了にともない改選が行なわれ、新たに専務委員1名、常務委員2名が委嘱された。また、総務委員会が新設された。役員・顧問および各種委員名簿は下記のとおり。

(敬称略：アイウエオ順)

運営委員長：熊谷　洋

運営委員：江見康一、小泉　明、小平　敦、武見敬三、田村貞雄(新)、筑井甚吉、藤川正信、藤野志朗、不破敬一郎、土屋健三郎、津村重舎、中山昌作、安川正彬

信託管理人：三藤邦彦

専務委員：小平　敦

常務委員：田村貞雄、中山昌作

顧　　問：板垣與一、大江精三、中村　元、渡辺　慧

総務委員会

委員長：専務委員、副委員長：常務委員

委　員：江見康一、武見敬三、筑井甚吉、土屋健三郎、藤沢正輝、藤野志朗、不破敬一郎

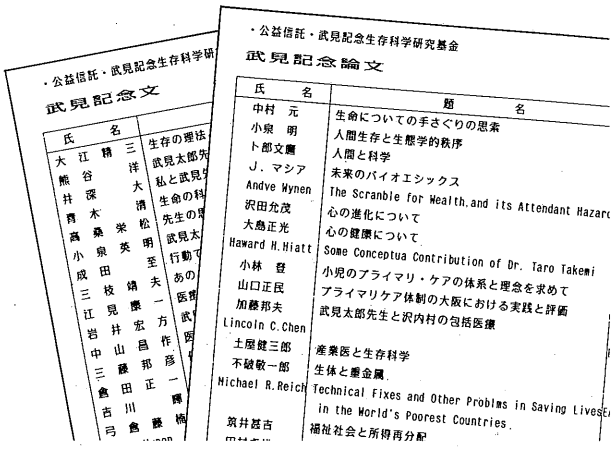
表彰助成委員会、武見記念論文・文集編集委員会、武見資料委員会は従来通り。

次いで、ニュース・オブ・ニュースの第3回理事会の記事で紹介したように、財団と基金の研究と情報の交流の場であり、両者を機能的に一体化する要である生存科学研究会が、今回から基金の運営になることが決まった。これにともない、生存科学研究会の代表幹事、企画委員が、更に今回新たに始まる生存科学研究会分科会とその世話人代表が決定された。分科会名と代表幹事、企画委員、世話人代表者名は生存科学研究会報告の記事参照。

＊　＊　＊　＊

第3回武見記念論文・文集編集委員会

それぞれ20編ほどの武見記念論文、記念文が出揃い、4月21日編集委員会が開催され、愈々編集作業が開始される。武見資料集と並行して印刷・出版の作業に進む予定である。


・公益信託・武見記念生存科学研究基金

武見記念論文

氏　名	題　名
中村　元	生命についての手さぐりの思索
小泉　明	人間生存と生態学的秩序
卜部文鷹	人間と科学
J．マシア	未来のバイオエシックス
Andve Wynen	The Scranble for Wealth.and its Attendant Hazarc
沢田允茂	心の進化について
大島正光	心の健康について
Haward H.Hiatt	Some Conceptua Contribution of Dr. Taro Takemi
小林　登	小児のプライマリ・ケアの体系と理念を求めて
山口正民	プライマリケア体制の大阪における実践と評価
加藤邦夫	武見太郎先生と沢内村の包括医療
Lincoln C.Chen	
土屋健三郎	産業医と生存科学
不破敬一郎	生体と重金属
Michael R.Reich	Technical Fixes and Other Problms in Saving Lives in the World's Poorest Countries.
筑井甚吉	福祉社会と所得再分配

ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告

3月から4月にかけてのハーバード武見プログラム活動報告

〈武見フォーラム〉

Health and Politics in South Africa

Moderator：Michael R. Reich

Panelists：

- Apartheid and South African Health System with Special Reference to Non-Racial Organization of Health Professionals / Salim Karim
- Child Health in South Africa / Jane G. Schaller
- US Support for Progressive Non-Racial Health Related Activities in South Africa / Stanley Sagov
- Occupational Health in South Africa / Johnathan Myers

〈武見研究セミナー〉

- Meta-Analysis in Occupational Health ; Case Study of Asbestons and Gastro-intestinal Cancer / Howard Frumkin
- Occupational Illness and Injury Surverillance : Exploring and Options / Tish Davis
- Causal Inference for Non-Experimental Data / Jamie Robins
- Sociological Context of Occupational Health in South Africa / Jonny Myers
- Vaccines : Current Status and Future Prospect / Julia Walsh
- Postwar Trends in Japanese Pharmaceutical Policy / Michael M. Reich
- Aids Updates / David Hunter

（第4回武見フェロー　大前和幸）

●予告

第39回生存科学研究会のお知らせ

今年度の生存科学研究会は、新たな年間テーマ及び財団の受託研究や自主研究の2つのテーマで行なわれることになりました。昭和63年度の第1回の例会は、下記の要領で開催されます。

日　時：　昭和63年5月21日(土)
　　午後2時～午後5時

場　所：　農協ビル8階　第一会議室
　　(千代田区大手町1-8-3)

演　題：

Ⅰ.年間テーマ「生存の質」に関する講演
　産業医科大学における「生存の質を考える研究会」の報告
　産業医科大学　伊藤幸郎教授

Ⅱ.財団受託研究：兵庫県生存科学研究組織の設立に関する調査研究
　産業医科大学　久保利晃教授

第3回武見国際シンポジウム
「開発途上国への国際保健医療協力」のご案内

(財)生存科学研究会は今夏、第3回武見国際シンポジウムを下記の要領でハーバード大学公衆衛生大学院武見講座との共催で開催いたします。日本、アメリカのみならず開発途上国からも保健医療協力問題に関心のある専門家が多く参加され、活発な討議が期待されます。また、第3日目には一般公開講演会が企画されておりますので、維持会員の皆様もご参加下さい。

❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋

〈シンポジウム〉(招待者のみ)
日時：7月1日(金)、2日(土)
場所：東京大学山上会館（東京・本郷）
「途上国における健康問題に対する国際協力」
セッション1. 途上国の健康状態の変化と現状
セッション2. 国際保健医療協力の変遷
セッション3. 国際保健医療協力の現状
セッション4. これからの国際保健医療協力

❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋

〈一般公開講演会〉
日時：7月3日(日)午後1時30分～5時
場所：国際研究交流会館（東京・築地）
「国際保健医療協力の理想と現実」
－日本に求められているもの－
基調講演　中島　宏(次期WHO事務局長)
パネル　蟻田　功(国立熊本病院長)
リンカーン・チェン(ハーバード大学教授。アメリカ)
A.サマラシンゲ(ペラデニヤ大学助教授。スリランカ)
金子義徳(東邦大学名誉教授)
司会　開原成允(東京大学教授)

編集後記

このニュースがお手元に届く頃には、爽やかな皐月の風のなかで、新年度の新たな装いの下にスタートした研究所の諸活動も軌道に乗り始めていることでしょう。諸科学の統合的理解により、その諸科学を発展させるべき方向までも含めて、人類の健やかな生存のあり方を探るという、大きな目的に向かって活動している生存科学研究所の努力と、その理想の大きさ故に遭遇する苦悩のあとが、設立以来今日までの経過を振り返って見るとよくお解りいただけると思います。

この壮大な理想に魅された人々の集まりである生存科学研究会が、新たに研究分科会を作ってそれぞれの研究テーマの掘り下げを行なおうというのも、統合のまえの地盤固めという、この理想実現のための一翼を担う活動であるといえましょう。　(N)